

世界を結ぶロシア現代美術と文化

—研究・普及・国際交流



鴻野 わか菜 Kono Wakana

大学院人文科学研究院准教授

専門分野：ロシア文学・文化

1995年、東京外国語大学外国語学部ロシア・東欧語学科卒業。1997年、東京大学大学院人文社会系研究科欧米文化研究修士課程修了。1999年より文部科学省アジア諸国等派遣留学生としてロシアに留学し、2002年、国立ロシア人文大学大学院歴史人文学部ロシア文学史学科修了(Ph.D)。同年、東京大学大学院人文社会系研究科欧米文化研究博士課程を満期退学し、千葉大学文学部に着任。2006年、東京大学にて博士(文学)取得。

NHK ラジオ「ロシア語講座(応用編、ロシア絵本とファンタジー)」、国際交流基金現代ロシア文化調査コーディネータ、BBC Russian com.文化欄などを担当。1998年、アンドレイ・ペールイ研究で日本ロシア文学会奨励賞受賞。2005年、千葉大学ベストティーチャー賞受賞。共著に『イリヤ・カバコフ世界図鑑——絵本と原画』(企画・監修：神奈川県立近代美術館)、『幻のロシア絵本 1920-30年代』(淡交社)、『ロシア語の教科書』(ナウカ出版)他。訳書にレオニート・チシコフ『かぜをひいたおつきさま』(徳間書店)、イリヤ&エミリア・カバコフ『プロジェクト宮殿』(国書刊行会)等がある。

—— どのような研究内容か？

1960年代から現在にかけてのロシア現代美術・文化を研究しています。ソ連時代の文化統制を経て、ペレストロイカ、ソ連崩壊、新生国家の混乱期を経験した作家達が、どのような創作活動をしてきたのか、美術をめぐるシステムがどのような変化を遂げてきたのかを、通史的に研究しています。ソ連期の非公認芸術の展開、文学と美術の相互関係などに着目し、ロシア美術と文化の特質を考察しています。

研究の基盤となるのは、各作家についての個別研究です。各作家に関する資料や先行研究だけでなく、作品が源泉とするロシアや世界の多様な文化を学びつつ、作品を調査し、作家と対話を重ね、自分の解釈を確立するという研究方法を取っています。作品を調査し、作家に会うために、世界中どこへでも出かけていきます。2017年3月には、作家アレクサンドル・ポノマリョフ主宰の南極ビエンナーレに参加し、南極で美術作品の展示と調査を行いました。近年は、こうしたビエンナーレやアートプロジェクトについての研究にも取り組んでいます。

—— 何の役に立つ研究なのか？

学界での活動と並行して、これまで約20の展覧会、芸術祭に研究者として協力し、美術館との作品共同調査や図録の翻訳、執筆を行ってきました。なかでも、神奈川県立近代美術館等で開催された2007年の〈イリヤ・カバコフ『世界図鑑』——絵本と原画展〉では、カバコフ研究の成果を役立てると同時に、学芸員や編集者から多くの示唆を受け、その後の研究や活動のための方法論を学びました。また、2017年6月には、文学部「スラヴ文化論演習」の受講生約20名と共に、ニ



南極にてポノマリョフと

作家アレクサンドル・ポノマリョフと南極にて(2017年3月)。南極ビエンナーレのコミッショナーであるポノマリョフとはロシア留学時代に知り合い、その作品を長年研究してきました。(提供：五十嵐靖晃)

キータ・アレクセーエフの新作展を千葉大学附属図書館で開催しました。

地方公共団体が開催する芸術祭にロシアの作家を紹介する活動もしています。ロシアの作家と地元の方々の間に交流が生まれ、日本滞在が作家の新たなインスピレーションとなるのを目の当たりにする機会に恵まれ、美術を介して人や文化の交流が広がっていくことを実感しています。

研究対象である作家が執筆した絵本の翻訳にも携わっています。絵本や美術展は、同世代や次世代の子供達へのプレゼントにもなり、自分のライフワークの一つだと感じています。



南極ビエンナーレ

南極ビエンナーレでは、13カ国の作家、研究者、航海士ら約120名とロシアの研究船に同乗し、13日間の航海を共にしました。船内ではレクチャーやディスカッションを行い、南極大陸や島々では美術作品の展示や調査を行いました。千葉大学文学部は、ユネスコと並んで南極ビエンナーレを後援しています。(提供：南極ビエンナーレ)



ニキータ・アレクセーエフ展

千葉大学文学部主催〈ニキータ・アレクセーエフ 岸辺の夜展〉は、文学部で学んできた外国語、日本や外国の文学・文化・歴史についての知識、留学の成果などを活かして、学生自身が図録の執筆や作家への取材を行った展覧会です。千葉大学文学部では、ロシア文学・文化の卓越した研究者である鳥山祐介准教授らの尽力のもとにロシア文化研究やロシアとの交流活動が活発に行われており、本展もそうした成果の一つです。(撮影：鴻野)

カジュラーエフと

ダゲスタンの作家マゴメト・カジュラーエフの展覧会で作家と懇談する鴻野准教授。(2012年、モスクワ、国立現代美術センター) (提供：アンナ・グーセワ)

文化の研究と紹介は、国際的な相互理解、共生、平和の実現にも不可欠だと考えています。

—— 今後の計画は？

現代文化研究と並行して、20世紀初頭のロシア文学・文化研究、絵本研究も行っており、将来的には、20世紀ロシア文化史を俯瞰する研究をしたいと考えています。展覧会や翻訳、作家や研究者の招へいを通じてロシア文化を日本に紹介し、文化交流を進める仕事も続けていきたいと思っています。



クローキン・ギャラリー

2015年12月、モスクワのクローキン・ギャラリーで開催されたウラジーミル・ナセトキンの個展にて、作家や研究者と共に。(提供：アレクサンドル・ペトロヴィチェフ)

—— 関連ウェブサイトへのリンク URL

- ▶ 鴻野「舞台は南極。「第1回南極ビエンナーレ」で問い直す
人類と芸術の関わり」『ウェブ版美術手帖』
- ▶ 南極ビエンナーレ サイト
- ▶ 研究成果（千葉大学 curator）

—— 学生へのメッセージ

美術研究、文学研究、言語学、歴史、比較文化研究などの人文学の学びは、他者の言葉や文化を理解し、他者に自分の言葉と文化を伝えるという人間のもっとも根本的な営みを支えています。文化、社会、人間を対象としてその歴史や諸相を学ぶ人文学は、現在と未来を生きるためのいくつかの視座を与えてくれます。文学、文化、そして人文学を通じて多様な世界を知ることは、若い皆さんが世界の中で自分の居場所を見つけるのを助け、生きる力を育んでくれると思います。